
思春期スイッチ。

乾 弘毅

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

思春期スイッチ。

【Nコード】

N8198Y

【作者名】

乾 弘毅

【あらすじ】

やたらお金のかかるバレエを辞め、これからは充実した学生生活と安定した進路を目指そうと猛勉強の末に主席で高校に入学した梶川愛。

あのときバレエを続けていたら…、なんて自分にも誰にも言われたくないから、勉強も友達も恋愛も、ぜったいぜったいガンバるのだ、と健気なカンジで生徒会長の伊藤和也の思春期スイッチを連打するお話です。

1. 順風満帆なようで前途多難かもしれない

入学式で新入生代表の挨拶をするという晴れ舞台から梶川愛の高校生活は始まった。

ぜひこの調子で順風満帆な3年間を送りたいと思います。

にやり。

高校生活を充実させるために部活やったほうが良いかなあ、と松村さんと話していたら、たまたま通りかかった中井さんに「新入生代表は創己会に入るんでしょ」と言われた。

ソウキカイ？機会部とかなんか？とは違うよね。

「生徒会執行部。3年間ずっとではないかもしれないけど、1年生の間は創己会所属のはずだよ」

知らなかった。

中井さんは3年生に創己会所属のお兄さんがいるので詳しいらしい。「でも先生にはなんにも言われてないよ」と言ったら、お兄さんに確認してくれることになった。

中井さんによく似た雰囲気眼鏡男子に案内されて創己会室に行くと、そこには3人の先輩がいた。

この4人以外は行事や会議があるときしか顔出さない人がほとんどらしい。

3人の中のひとりは入学式で在校生代表挨拶をした生徒会長の伊藤和也先輩だったのですぐ分かった。

マッチョ系イケメンという名の壁、と記憶したので忘れることはないでしょう。

あとの女子ふたりはまだ覚えられない。

名前は覚えた。

どっちかが副会長の三井香奈先輩でもうひとりが書記の藤井紗英先輩。

中井さんのお兄さんは会計だそうだ。

ところで伊藤先輩の機嫌の悪さがハンパない。

ただ黙ってるだけなのに空気がピリピリして、三井先輩も藤井先輩もずつと腫れ物に触るように接している。

私のせい？なわけないよね初対面だもん。

なんかものすっこいめんどくさいカンジ。

「中井先輩、伊藤先輩の思春期スイッチが押されていて怖いので帰って良いですか？」

小さな声で言ったつもりだったのに聞こえたらしい。それまでそばを向いていた伊藤先輩とバッチリ目が合ってしまった。

やばい。

身の危険を感じたのでとりあえず何事もなかったかのように笑ってごまかした後そのまま退室した。

そして人生最速のダッシュで帰宅した。

きつと初めてあった新入生のことなんて次回までには忘れてくれると思います。

2。蝶の夢

お昼休みは学校探検がてらあちこちでお弁当を食べることにしている。

学校通の中井友美ちゃんに案内役をしてもらって、入学試験で仲良くなった松村有里ちゃんと、同じ中学出身の山口美幸ちゃんと食べます。

今日は体育館のステージの端っこ。

体育館は飲食禁止ですが、ステージ脇は人が来ない絶好の隠れ家だそうです。

校内放送もちゃんと流れてます。

「あ。蝶の夢だ！梶川愛、踊ります！」

スピーカーから流れてきたのは、最後のバレエコンクールで踊った曲だった。

幼稚園から始めたモダンバレエは2年ちょっと前まで私の生活のほとんどだった。

8月のイベント公演、9月の発表会、10月の芸術祭、11月の海外公演、12月のクリスマス公演、1月には教室選考があつて、選ばれれば2月からのコンクールが全国までいけば3月末まで続くことになる。

お金がかかっていることは分かっていたけど、ひとりっ子だから大丈夫なのかな？と深く考えたことはなかった。

中1から中2に進級した春休み、お父さんに「話がある」と言われて初めて知った。

私のバレエのせいで家にはもうお金がなかった。

「お前が本気でバレエを続けるつもりなら今後は借金でもなんでもして賄ってやる」そう言ってくれた。バレエ教室をかえても良い、宝塚音楽学校を受験したって良い、でも学生らしい生活のない人生

を選ぶことに後悔がないかだけが気掛かりだ、よく考えなさい。

それまでは、このままバレエを続けながら高校に行って、卒業したらバレエ教室の推薦枠でロシアに留学して、帰ってきたらバレエ教室の先生になるもんだとばかり思っていた。

でもそれはそれでもものすごく贅沢なことで、ちゃんとした考えもなしに選んで良いことではなかったことに、私はそのとき初めて気づいた。

よく考えて、高校生になることにした。

優秀な高校生になって、学生らしい生活もバッチリ堪能して、できれば推薦入試で国立大学に入って、奨学金で薬剤師とか安定感のある職につきたい。

お父さんお母さん見ていてください。愛は2人に後悔はさせませんよ。

バレエは大好き。

でも私にはもっと違う生き方もあるはずだ。

ニーアップをふわりと決めたら足の甲が痛かった。

悲しいような、いっそ清々しいような。

踊り終わって、くるくるとターンでみんなのところに戻ると、おや？人が増えている。

中井真先輩と伊藤和也先輩だ。
がーん。

…ぜったいどつかでパンツ見えてるわー。

3. ミシンかたかたシュークリーム

1年生で創己会に入っただのは私だけ、人材育成枠なので実務ではなく雑用が主な仕事です。

今は5月に行われる運動会に向け、創己会のネーム入り腕章を製作中。

イマドキ女子は縫い物が苦手らしく、おかげで自宅から持ち込んだロックミシンとコンピュータミシンで基地をつくり大変居心地の良い空間のなかひとりで作業しております。

腕章なんて、バレー時代に作らされたブツに比べればギャザーもないスパンコールもないし、ちよろいモノですよ。おほほほ。

「ご苦労様。ゴメンね手伝えなくて。シュークリーム買ってきたしコーヒー入れるから休憩して？」

優しい三井先輩がさらさらの髪を揺らしながら甘やかしてくれたりもするし。

創己会サイコー！

高校生活サイコー！

高カロリーサイコー！

コーヒーにも砂糖とミルクをたっぷり入れてあまあまにするのだ。うふふ。

目の前で中井先輩が「入れすぎ…」と呟こうが伊藤先輩がどん引いていようが気にしない気にしない。

むしろ手をつけないならそのシュークリームも私にちょうだいちょうだいなのだ。

ニコニコと笑顔をはりつけたまま、まずは中井先輩をロックオン。

「…欲しいの？」

うんうんうん。

じゃあ…、と中井先輩がお皿をこちらに差し出してくれようとしたとき「待て」と伊藤先輩の声がした。

「俺のをやる」

なぜかどこかで思春期スイッチを押されたくらくめんどくさいカンジに機嫌が悪くなっている。

中井先輩しか見てなかったので全然気づかなかったけど、何がスイッチだったんだろ？

伊藤先輩の機嫌が悪いと室内の雰囲気が悪くなるので今後の対策のために何がスイッチか分かると良いんだけど？

でもせっかくなので気が変わらないうちにいただけるモノはいただく。うふっ。

中井先輩と伊藤先輩のシュークリームがのった皿を左右の手にひとつずつ持って「三井先輩、コーヒーおかわりくださいねっ？」と振り向くと、三井先輩がどこかでおもしろスイッチを押されたくらく、やたらとバカウケ中だった。

4。私たちは違う道を選んだ

美波ちゃんが訪ねてきた。

「愛ちゃん…」

私の顔を見たときたん泣き出した美波ちゃんを私は抱きしめた。

「大丈夫だよ。泣かないで」

美波ちゃんは私がバレエを辞めてから2年連続センターを踊っている。今年のコンクールではソロパートも付いた。でも残念ながら結果は期待されたほどではなかったそうだ。

そのことで他の研究生にずいぶんつらく当たられているらしい。

「もし連絡があったら、できれば励ましてやってほしいの」と美波ちゃんのお母さんに電話で頼まれたのは、4月になったばかりのことだった。

私がセンターだったときにはむしろ美波ちゃんが私をイビリ倒していた。

お嬢様育ちで悪気はないんだろうけど、それなりに悪意を感じる人でした。

…。

もう過去の話です。

それに高校生のいまセンターで踊るということは、バレエ教室のリーダーであるということ、それは中学生の私がセンターだった時よりもはるかに重たい意味を持っている。

だから、お世話になったバレエ教室の先生たちのためにも、私は彼女を励まして前を向かせなくてはいけないと思う。

「ねえ美波ちゃん、中1の時のコンクールで踊った蝶の夢を覚えて

る？あれからもうずいぶんたったよね。私はバレエを辞めて、美波ちゃんはずっとバレエを続けてきた。いまの私はもうニーアップも上手くできないし、美しいポアントもできない。でも美波ちゃんは違うよね？いまの美波ちゃんがセンターなのは、努力を続けてきたからだよ。私がセンターだった時より、他の誰より、その場所が相応しいからだよ？」

美波ちゃんは、本当はいない私と自分を比べて苦しんでいる。

バレエを辞めずにたゆまぬ努力を続けて高校1年生になった梶川愛。そんな人はどこにもいない。

そのことを、ちゃんと理解しないとイケない。

美波ちゃんも私も。

私たちは、違う道を選んだんだ。

5. 伊藤先輩は基本良い先輩です

「運動会の前に新入生テストがあるからゴールデンウィークに私の家でお泊り勉強会しない？」と友美ちゃんが誘ってくれた。

お泊り会！行く行く！
すっごい楽しみー。

「なんか良いことでもあったのか？」

めずらしく機嫌の良い伊藤先輩に聞かれた。

伊藤先輩は気がつくと突然不機嫌になってたりして時々すごいめんどくさいカンジになるけど、基本優しくて良い先輩だということがだんだん分かってきました。

自分は食べないのにカワイイ後輩のために毎日おやつを持ってきたくれたりします。

…いや、別に餌付けされてないですよ。

「えへへー、ゴールデンウィークに友美ちゃんたちとお泊り会なんですよ。友達のお家にお泊りなんて初めてなのですっごいすっごい楽しみなんです」

そうか、良かったな。と微笑む伊藤先輩の後ろで、なぜか慌てた様子の中井先輩が唇に指で作ったバツ印をあてている。
はて？

それで誰の家に泊めてもらうんだ？と続ける伊藤先輩に「中井家です」と答えると、なぜか物凄い速さで扉まで移動した中井先輩を伊藤先輩がじっと見つめた。

「…ただの勉強会だよ」

「…」

「別にワザと黙ってたわけではないし」

「
…」

「
…」

「
…」

「
… お前も泊まりに来る？」

「
考えておこう」

なんかいま緊迫してたなー、と思いながら伊藤先輩が剥いてくれた
一口サイズのチョコレートをもうひとつ食べた。

6. 初恋のお話

お泊り会初日。

伊藤先輩も中井先輩の部屋にお泊りにきていた。

友美ちゃんの部屋には私たちがいるから、本日の中井家にはお父さんお母さんに高校生の子供が6人。

「順番にお風呂入ってたら夜中になるからあんたたち銭湯行きなさいねー」と言われて晩御飯の後にみんなで近くの銭湯に行くことになりました。

「私ホテルの大浴場とかは入ったことあるけど、おサイフ持って銭湯行くって初めてだ」とカミングアウトしたら、「愛ちゃんってもしかしてすごいお嬢様なの？」ってみんなに聞かれた。

「そんなことないよ。バレエやってる子の中にはすごいお嬢様もいっぱいいたけど、うちは庶民なので危うくバレエで破産するところでした」

「えー！バレエってやっぱりそんなにお金かかるお稽古事なんだ」
「最初はレッスン費と発表会の参加費くらいなんだけど、そのうち海外公演とかに参加するようになったらドーンとね。…そういえば海外公演っていえば今でも忘れられない初恋の話があるんだけど聞く？」

それは私が小学6年生で海外公演に4回目の参加をした時のこと。
ステージを終えてみんなを着替えているところに男性がやってきて、ほぼ真っ裸の私に「エクセレントなんかかんとか」と言いながらキスをした。

ちなみに私にとってはファーストキス。

その人は小さな顔と長い手足を持った細マッチョイケメンで、世界的にも期待されている若手天才バレエダンサーだったから、みんなは私のことをラッキーだって羨ましがってた。

だつてもものすごく高く跳んでおまけに止まってるみたいに見える人だったのよ。

私もぼーってなって、これが恋なのね…、とか思いながら着替えて廊下にでたら、その人がムキムキマツチョな彼氏とすごい濃厚なちゅーをしている真っ最中で。

「初恋はおよそ五分で終了しちゃった」

この話、バレエダンサーにとってはなんてことないバレエあるあるだけど、バレエと関係ない人にとっては突っ込みどころ満載の衝撃的な話みたいで、いつ話してもウケが良いんだよね！。

今回もウケた。

特に伊藤先輩の反応は激しかった。

お楽しみいただけただけで良かったです。

7. 女子会議

お風呂でムネおつきいねーとかエロいチェックを入れつつ楽しく過ごしていたら、友美ちゃんに「愛ちゃん彼氏はある？」と聞かれた。

「いないー。でも彼氏ほしいなあ。美幸ちゃんはいまでも秋本くと付き合ってるの？」

「えっ！美幸ちゃん彼氏いるの？」

「中学のとき付き合ってたよね？」

「愛ちゃんなんでそんなこと知ってるの…。いちおう、まだ別れてはないよ、たぶん。でも学校が離れちゃったし、これからどうなるかわかんナイ…」

「そっかあ、さびしいねー」

「なんかオトナ。友美ちゃんは彼氏いるの？」

「いない。いたことはあるけど別れた。有里ちゃんは？」

「彼氏なんていたこともないよー」

「そっかあ。有里ちゃんは私と一緒にだ。はやく彼氏ほしいねー」

「…伊藤先輩とかどう思う？」

「えっ？友美ちゃん伊藤先輩が好きなの？」

「違う！私じゃなくて！」

「あのね愛ちゃん、友美ちゃんは伊藤先輩が愛ちゃんのこと好きっぽいって言うてるんだよ」

「ええっ？！そうなの？」

「やっぱり美幸ちゃんもそう思った？」

「うん。でも愛ちゃんはぜったい気がつかないだろうからほっとくつもりでした」

気づかんかった。

でもこれは…。

「彼氏ゲットのチャンス…」

「いや待て愛ちゃんはやまるな」

「そうだよ。もうちよつとちゃんと考えないと」

「そもそも愛ちゃんは伊藤先輩のことどう思ってるの?」

「先輩のこと…?」

いち。先輩は時々めんどくさい。

に。先輩はたくさんおやつをくれる。

「たまに機嫌悪いとめんどくさいけど、良い彼氏になりそう」

…いえ、別に餌付けされてませんよ。

「愛ちゃんは明らかに恋愛感情とは違う基準で言ってるような気がするんだけど?」

「まあ、人それぞれの基準があるから一概に否定はしないけど…」

「とにかくはやまらない。伊藤先輩の気持ちだってまだ本当のところは分からないだし」

そうか。

まだ分からないのか。

めくるめく男女交際の世界がひろがるのかと期待したのに。

…ちっ。

「…愛ちゃんが舌打ちした」

「黒梶川愛だ」

「思いのほか腹黒いね」

失礼な。

8. ヤキモチスイッチ

ロビーでさっそく伊藤先輩の気持ちにあれこれ探りを入れようと思っ
たら、中井先輩に「ちよつとゴメン」と止められてしまった。

「友美。お前何を言った？」

「なんていうか、本当はもう少し穏やかにゴールデンウィークを過
ごしたかったんだけど、愛ちゃんの反応が予想外で……」

「……。ちよつとあつちのほうで話そうか？」

中井先輩と友美ちゃんはロビーの隅っこでずいぶん長い間話し合っ
ていた。

なんとなく、友美ちゃんが説教されてるくさい。

中井先輩の口が小さくアタマイタイと動いた後で「梶川さんちよつ
と」と手招きされた。

「話はだいたい聞いた。ええと、俺も和也と直接そのことについて
話したことはなくて。まわりが言うことではないし、きっと本人が
言うと思うから、あの、悪いんだけど、今回の話は聞かなかったこ
とにして、もうちよつと和也の出方を待って欲しいんだけど良い
かな？」

こんなにまわりくどくて歯切れの悪い中井先輩はめずらしい。
どうやらセンシティブな問題らしい。

「わかりました」

振り向くと伊藤先輩が激烈にカンジ悪くなっていた。

「……これってヤキモチかなあ？」

だとしたらかなり単純なヒトなんじゃないの伊藤先輩って？

「ところで、僕の平和が守られるように和也に言い訳をするとしたら何を言えば良いと思う？」

「伊藤先輩の誕生日って分かります？」

「……？8月24日だけど？」

「じゃあなんか聞かれたら、伊藤先輩の誕生日まで秘密って言つていてください」

あとはあのめんどくさいのをどうするかだ。
ふうむ。

私は伊藤先輩の前まで行くと、肩にかけていたバスタオルを外してくるーっとターンした。

「先輩、カワイイですか？」

かわいと思うのよ？ふあふあもここのパーカーとショートパンツとレッグウォーマー。

「カワイイ後輩にぜひコーヒー牛乳を買ってください」

コーヒー牛乳はおいしい。

伊藤先輩は良い人だ。

はやく告白とかしてほしいな。

9。 はじまりはじまり

勉強会という名目で中井家にお邪魔させていただいている以上、やはり恥ずかしくない成果をあげたい。

いつもより気合い入れて勉強させていただきました。

…中井先輩にもお泊り会の間はおとなしくしててってクギさされちゃったし。

「愛ちゃんって、とりつかれたように勉強するんだね」
有里ちゃんがちょっと引き気味です。

勉強に入り込みすぎて、友情をお留守にしちゃった？

「んー、そんなことないよ？」

これからもうちょっと気をつけよう。

後は適当におしゃべりしながら勉強した。

楽しかったけど、ぬるま湯のような心地良さに不安になって、なかなか寝付けない。

暗記モノだけちよつとやってからもつかい寝ようかな、と思いついて、単語帳と歴史年号帳を持って部屋を出た。

中井家の2階には子供部屋とは別にセカンドリビングがあって、私たちはそこで勉強会をしている。

集中して勉強していると、だんだん心が落ち着いてくるのがわかった。

そろそろ眠れそう。

ふう、とため息をついたとたん、「終わったのか」と伊藤先輩に声をかけられた。

!!!!!!

びびびびっくりした！

大声を出さなかったてもはや奇跡だし！

「あまりムリするな」

「…もう終わりますよ？」

「勉強のことだけじゃない」

…背中が逆立つってこういうことをいうのかもしれない。

「なんのことかわかりません」

「そうか。…でもムリするのは感心しない」

「少しくらいムリしないと後悔しそうで不安なんです」
言い過ぎました。

伊藤先輩は「そうか」と呟くと、私の頭をひとなでして、キャラメルをひとつ剥いて食べさせてくれた。

…。

どうしよう。

こんなつもりじゃなかったのに。

…。

この人のことを好きになったかもしれない。

10。あぶないあそび

「甘いもの食べたい」

じつ…、と伊藤先輩を見つめる。

いまは私と伊藤先輩しかない。

中井先輩がコンビニまでアイスを買に行ったとたん、ほかのみんなは勉強会をやめて友美ちゃんの部屋に行ってしまった。

「これしかないけど？」

と言いながら先輩は皿の上のチョコをつまんだ。

「…ダメだ。とけてる」

ずっと出しっぱなしだった生チョコは先輩の指先でとろりと崩れてしまった。

「いま真がアイス買って戻ってくるからそれまでガマンしてろ」

「やだ」

「そんなこと言ってもこれじゃ食べれないだろ？」

ほら？とチョコで汚れた指先を差し出してくる。

「食べれるもん」

先輩の手首を掴むと、その指先をぺろりと舐めた。

人差し指と親指を丁寧に舐め上げて口に含むと、先輩が凍りついたように動かなくなった。

「…先輩、美味しい。…もつといっぱい食べたいな？」

掴んだ手首に頬をよせて、先輩の顔を見つめた。

つぎの瞬間、風のように現れた中井先輩に友美ちゃんの部屋へ放り込まれた。

「いますぐ4人ともそこに正座しなさい」

無表情の中井先輩の前に並んで正座する私たち。

「どういふことか説明してもらおうか」

「えっと、ちょっとばーいずらぶマンガごっこを…」

「黙れ」

説明しろって言ったくせに黙れって言った。

「友美、いい加減にしないとお前のその腐れマンガ全部焼いて灰にするからね。松村さんと山口さんも、こういう悪ふざけは絶対にダメ」

それから、といいながらこっちを見た中井先輩はとっても怖かったです。

「梶川さんも、お泊り会の間は大人しくするって約束したよね。まして梶川さんは女の子なんだから。和也のスイッチが入ったらどうするつもりだったの？」

それはそれでありかなと思ったんだけど…。

「ごめんなさい」

中井先輩が怖いので謝ったとききました。

そーっと少しだけドアを開けて覗くと、伊藤先輩がさっきと同じ姿勢のまま指先を見つめて固まっていた。

「やり過ぎちゃった？」

「当たり前だ。…この後どうする？」

「知らん顔でアイス食べたら夢だったかと思ってなかったことにならないかなー？」

「それは無理だろう…」

でも他になにも思いつかなかったのでもそのまま実行しました。

11。梶川さんのお母さんって…

お泊り会二日目の夜、突然お母さんが中井家に現れた。

「お母さん何しに来たの？…なにこの荷物？」

「お土産よ。お。み。や。げ。おかげ様でパパと2人で楽しく旅行に行かせていただきました。…で、中井さんにお礼を兼ねてお土産を買ってきてみました」

それにしたって段ボール2箱はいっぱい過ぎでしょ…。

「食べ物ばかりだから消えてなくなるわよー。食べ盛りの高校生が6人もいるんだから、明日の解散までにはほとんどなくなっちゃうわよ。ヘイキヘイキー」

「そのうちの過半数は女子だし、愛たちは勉強会をしているのであって柔道部の合宿をしているのではありませんよ？」

お母さんは「良いから良いから」と手をパタパタさせると、「…で」と真顔で続けた。

「男子2人はイケメン？」

「…」

ねえねえイケメン？と目を輝かせるお母さんのために、先輩たちに荷物を運んでもらうことになった。

「うわ、すごい分量だな」

「うちとしても、さすがにこんなにたくさん頂くわけにはいかないと思います」

「久しぶりの旅行でつい買い過ぎちゃったー。でもうちの分も同じくらい買っているから、受け取ってくれないと処理しきれないし、そしたらパパに怒られるから困っちゃう」

えへ？と嬉しそうに笑ってごまかさないでお母さん。
なんだか鏡を見ているようで心が折れます…。

「とりあえず母を帰したいので受け取ってください」と先輩たちに
1箱ずつ持つて行ってもらった。

先輩たちのお尻を眺めたおすのはやめて欲しいと思いつつ「想像通
りのイケメンでしたか？」と聞くと、お母さんはムフフと笑った。
「想像とはタイプが違ったけど、2人ともカワイイわー。やっぱり
若いと肌のキメ細かさが違うわねー。ああ、目の保養になった。今
度はうちでお泊り会してもらおうと」

うちでお泊り会しても中井先輩と伊藤先輩は来ないよ？と突っ込む
前に中井家のお父さんお母さんがみんなを引き連れて出てきてしま
った。

「すいません、あんなにたくさん気を使わせてしまって…」

「いえ、ご挨拶が遅くなりまして、梶川愛の母でございます。娘が
いない間に主人と旅行に行きましたらつい買い過ぎてしまいました。
どれも美味しいと思って買い求めた品でございますから、ぜひみな
さんで召し上がってみてくださいね？それに次回はうちでもお泊り
会をしたいと思いますからその時には遊びに来てください。では本
日はこれで失礼いたします」

びつくりよそ行きモードの挨拶を口からさらさらと垂れ流して颯爽
と帰っていかれました。

「梶川さんのお母さんって…」
黙れ。

中井先輩が私の逆鱗を刺激しそうだったので無言で制圧しておきま
した。

12。ちゅ

お泊り会の最終日。

昨日お母さんが持ってきたお土産のなかに能登牛が大量にあったのでバーベキューが行われることになった。

なんかゴールデンウィークの思い出づくりをやってこい的な意図が見え隠れしているような…。

考え過ぎ？

もう勉強会ではなくなっちゃったなーとは思うけど、中井先輩と伊藤先輩が家庭教師をしてくれたおかげでそこそこはかどったし、まあ良いや。

みんなも楽しそうだし。

肉祭り絶賛開催中です。

あれ？

でも伊藤先輩がいない。

お手伝いときはちゃんとしたのにな？

「中井先輩、伊藤先輩は？」

「あー、たぶん俺の部屋。寝てると思うわ。あいつ梶川さんのせいで寝不足気味だし」

呼んできてよ、と言ってる間も視線は肉から離れない。

…？

なんで伊藤先輩の寝不足が私のせいなんだろう？

…はっ！

中井先輩が私に伊藤先輩との接触を許可するなんて…。

恐るべき能登牛の魅力！

グッジョブ！

さ、中井先輩の気が変わらないうちに伊藤先輩に悪いことしに行かなくちゃ。

やったね。

…伊藤先輩ホントに寝てるわー。

あれあれ？

いつもよりカワイイ。

なぜ？

…。

目を閉じてるからかなあ？

伊藤先輩、なんかむやみやたらと目力強いんだもん。

…たまに見透かされたみたいで怖くなる。

まつげ長いなー。

眉太い。

鼻はゴツイけど鼻筋はきれいに通ってる。

というか顔全体がそんなカンジ。

いつこいつこのパーツが全部ゴツイのにキレイに収まってて。

おまけに背が高いわりに顔が小さいよね。

…よく寝てる。

ちゅーしても起きないんじゃないかしら？

ちゅ。

ホントに起きないや。

びつくりしてくれないと私ひどい変態みたいだわー。
がつくし。

…もうイヤや。

「伊藤先輩、起きないとお肉なくなっちゃいますよー。はやく起きてくださーい」
ゆさゆさゆさ。

伊藤先輩はゆつくり目を開けるとまっすぐに私を見た。
ちよつと怪訝そうに。

「いま…、俺になにかしなかったか？」

ちらり、と私の口を見た気がする。

あちゃー。

「揺り起こしました」

「いや、そうじゃなくて…。や、良いんだ。寝不足で変な夢を見ただけだ。…ゴメン」

言いながら真っ赤になって口を覆う。

「夢ってどんな夢ですか？」

ねえねえどんな夢？と言いながら顔を覗き込むと、伊藤先輩は真っ赤な顔で口を覆ったまま私の口を見てゴクリと喉を鳴らした。

「…。…なんでもない。…それより、そうだ、肉食いに行かないと肉食いに行かないと、と非常にわざとらしく連呼して伊藤先輩は部屋を出て行った。

あぶなかったー。

あやつく変質者みたいになるところでした。

13. そうつつもりではなかった

朝の創己会室ならたぶん誰も来ない。

そう思つて、いつもより1時間はやく登校した。

実際、予想通りだったわけですが。

私は鞆からお弁当用クーラーバックを取り出した。

でも中身はお弁当ではない。

保冷剤。

タオル。

濡れタオル。

目薬。

ちゃんと揃つてる。

ストレスを軽減するためにはいくつかの方法があるそうだ。

ストレスについて誰かに聞いてもらう。

ため息をはく。

笑う。

そして、泣く。

とにかく出す行為が有効らしい。

実際、泣くと涙と一緒にストレス物質が排出されるそうだ。

泣くというのはなかなか良い方法だと思う。

ひとりにさえなれば他人に迷惑をかける心配がない。

というわけで。

なんだかどうしようもなく行きづまってしまつて胸が苦しいので、
平和的解決を求めて泣いてみようかと思つた。

うちのお父さんを安心させるのは、新入生テストで1番をとるより難しい。

…お父さんも後悔したくないんだろう。

それは私も同じなんですけど。

物理的に解決できない問題って難しいよね？

高校受験が終わったいま、バレエを辞めた穴を埋めるのは思った以上に難しい。

梶川愛は泣きます。

30分後、携帯のアラームが鳴った。

そろそろ目を冷やさないと、泣いたことが一目瞭然の姿で教室に行くことになってしまう。

それは大変好ましくない。

お父さんから心配されているだけでもしんどいのに、友達にまで心配をかけるなんてありえない。

友達にウソ八百の言い訳をするのはツライ。

私は私なりに友達を大切にしたいと思っているので。

目の上に用意しておいた濡れタオルと保冷剤を重ねて置いた。

…眠い。

泣いたのは失敗だったかも。

…泣くと眠い。

…。

ぐー。

「梶川……？」

はっ！

目を覚ますと開いた扉のところに伊藤先輩がいた。

……ここどこ？

……。

！

やばい！

「いま何時ですか?!」

「え？12時半くらいだけど？」

さいあく。

人生初サボりです。

14。 けっこうやらかしたね…

早朝の創己会室に隠れひとりで泣いたら居眠りこいて学校を半日サボってしまった。

昼休みに伊藤先輩が声をかけるまで爆睡でした。
これってやばいよね？

慌ててお母さんの携帯に電話をかける。

「もしもし」

ほぼゼロコールで繋がった。

その意味に血の気が引く。

「もしもし。 愛です。 あの、生徒会室で勉強してたら居眠りしてしまっ

「先生には登校途中で具合が悪くなったみたいですって言うてあるから大丈夫よ？ いちおう、具合が良くなって本人がどうしてもって希望するなら登校させるけど、親としては念のため様子を見たいので欠席させるつもりですとも言っ

百点満点の言い訳をありがとうお母様。

「でもさすがにサボるわけには…」
と思っただけだ。

ひどい顔してる。

鏡を見て愕然とした。

目のまわりが赤い。

居眠りしてきちんと冷やさなかったからだ。

ステロイド入りの軟膏とかも用意すべきだった。

…いやそういう問題じゃない。

「…サボります。この件お父さんには？」

「言っていないし言うつもりない。あのね、パパは愛に一点の曇りもなく幸せになつてほしいと思つてる親バカも甚だしいヒトなんです。…だから、気にしないで良いのよ？」

昨日、新入生テストの順位が書かれた成績表を手に困惑気味な様子で「もつと普通で良いんじゃないか？」と呟いたお父さん。

普通つてなに？

「分かつてる。ありがとう」

気持ちを遮断して電話を切った。

…あとは伊藤先輩をどうするかだ。

間違いなくイロイロとまずい現場を押さえられてしまった。

こういうときの伊藤先輩は怖い。

ふせておきたい感情を見透かされる気がする。

そついうの苦手。

攻撃的な自分が出てくるから。

出来れば誰も傷つけない。

伊藤先輩のことも。

…それから自分のことも。

15. エスケープ

「泣いてたのか？」

心配してるのか呆れてるのかよく分からない声で言われた。

そりゃ、濡れタオルやら保冷剤やらの後始末グッズを並べて泣くなんて、呆れるよねえ。

「えっと、ちょっと新手のストレス解消法を試してみたんですけど、思いがけず爆睡してしまいました…」

えへへ？と笑ってごまかしたけどダメっぽい。

…なんかお怒りっぽい。

怖いし。

「ムリするのは感心しないって言わなかったか？」

「あの、べつになにかムリしたから泣いたわけではないです」

「じゃあなんで泣いてたんだ」

そういう追求やめて欲しい。

伊藤先輩には関係ない。

みたいな攻撃的な言葉が口滑って出そう。

「お年頃だからかなー？」

ボケてごまかすつもりだったのにトゲのある声になった。

…ちよっとイラっとはしてるし。

失敗した。

伊藤先輩、分かりやすく傷ついた顔しないでください…。

「スミマセン…」
なんか自分自身のふがいなさに泣けてきた。
涙腺に道がついちやったカンジ？

「いや、俺こそ」
と伊藤先輩がなにか言いかけたところで昼休み終了5分前の予鈴が鳴った。

もうちよつと落ち着いてねばれば時間切れだったのに…！
ちよつとしょつく。

と思ってる前で伊藤先輩は電話をかけはじめた。

「真？悪いけど俺体調悪いから帰ったことにしといて」
え？

「鞆？適当に隠しといて。うん。じゃあそういうことで」
そういうことってどういうことだオイ。

「じゃあ梶川は帰るしたくしろ」

…うむを言わせぬ口調ってこういうことなんだろうな。

一方の伊藤先輩はテキパキと棚からファイルに入ったプリントを何枚か選り出すと、フィルムファイルにまとめてから付箋を取り出してなにかメモして貼って創己会長席に置いた。

次に各委員会の名前が書かれた名札を机に並べていく。

そういえば今日は放課後に運動会運営についての創己会議があるんだった。

つまり、伊藤先輩がやっているのは本来私がやるべき仕事だ。

「あの、私やります」

「帰り支度は済んだのか？じゃあ保温ポットと湯呑み人数分出しといて」

伊藤先輩はポットにもメモした付箋を貼った。

続けざまに黒板に今日の議題と会議内容を書いていく。

達筆なうえに速い。

会議内容が完璧に頭にはいつているらしい。
一切メモとか見ないし。

「じゃ、行くか」

「え、そういうわけには」

「コピーとお茶くみは三井と藤井にふつといたから」
それはありがとうございます。

でもそうじゃなくて伊藤先輩までサボる必要ないよねってことを言
いたかったんですけど？

「ここでグズグズして俺と一緒にサボってるところを見つかりたい
ならここに居ればいいだろうが、俺個人としては5限が終わる前に
エスケープできたほうがありがたい。分かるか？」

…。

私もそのほうがありがたいです。

16. おやつでキュン

なんだか意図しないまま学校をサボることになってしまった。

伊藤先輩と一緒になんてバレたら生活指導室直行？

ぴーんち。

と思ってるわりにちゃっかり伊藤先輩のお宅にお邪魔しているワタシ。

だって朝から大泣きして赤パンダなのにお母さんのいる家には帰れないし、下手に外うるうるして補導されたり通報されたりしたくないし。

うん、しかたないしかたない。

伊藤先輩が連れてきてくれたんだもん。

伊藤家のご両親は2人ともシステムエンジニアで頻繁に出張があるうえに普段も夜10時前に帰宅したら早いほうなんだって。

そして伊藤先輩の家が私の通ってた小学校区内にあってびっくりでした。

小学校も中学校も同じとこ通ってたってことだよな？

ぜんっぜん知らなかったんですけどー。

「俺は名前だけは知ってたけどな。梶川愛は有名人だったし」

はー、私って有名人だったんだ。

「だから、最初に顔合わせした時はバレエで学校行事すらまともに参加してなかったくせにうちの高校に首席入学できるってなにそれ、とか思ってたイラっときた」

こわ。

「でもすごくいっぱい勉強したんですよ？」

「いまはそうだったんだろうと思うけど、その時はバレエ辞めてるなんて思いもしなかったから」

だよー。

私も辞めるなんて思わなかったし。

「なんで辞めたんだ？」

「ものすごいお金がかかるからです」

「…」

「あと父も、私が普通の学校生活を送っていないと気にしているようでしたから。で、バレエダンサーからリア充高校生にジョブチェンジしてみたんですけど、なかなか修業が足りないみたいで…」

やばい。

また泣けてきた。

このネタは泣ける。

「梶川はムリしすぎ。見ててたまに腹立つ」

そっぴいながら、缶入りクッキーを開けて1枚食べさせてくれた。

なんでだろう？

先輩におやつをもらうと心臓がキュンってなる。

やっぱり好きなのかな？

じ、と見つめてたら目が合った。

「もう1枚食うか？」

いや、そういう意味ではなかった。

でも食べます。

あーん。

もぐもぐしてたら伊藤先輩が赤くなって目をそらしてしまった。
いまのスイッチまじ分からん。
なんで赤くなっただろ？

17. あーん

「そういえば梶川昼飯まだだろ？」

「はい。でも今日はクッキーたくさん食べたしお昼抜きにします」

「…お前、食事とおやつの配分がおかしい」

「ご飯とおやつ両方がつついてたら太るじゃないですか」

「…」

伊藤先輩は無言でリビングからキッチンに移動するとでっかい冷蔵庫からトレーに乗った食事を取り出して電子レンジで暖めて運んできた。

トレーを私の前にずいっと出して一言。

「食え」

…。

たぶん、これは伊藤先輩の晩御飯用にセットしてあったんじゃないかしら？

見るからに食べ盛り男子1人分ですし。

「えっと」

「食え」

今度は箸で煮物をつまんで私の口の前まで運んできた。

これはあれかな？

食べさせてくれるつもりなのかな？

なぜか伊藤先輩はおやつするときいつも私の口までおやつを運んでくる。

いつかい手で受け取ろうとしたら不機嫌になってめっちゃ怖かったので、それ以来私も口を開けて食べさせてもらうことにした。

あーん、ぽい、って一瞬のことだし。

むしろいまでは食べさせてもらったほうが美味しく感じるくらいで

す。

中井先輩がげんなり顔で見ている、三井先輩が笑いをこらえきれず吹き出している、藤井先輩が恐ろしいモノを見る顔で固まっています、ちゃんと美味しく食べられます。

もはや餌付けプレイです。

しかもかなりの胸キュンプレイです。

ちよつと前まで「……いや、餌付けされてませんよ」とかス力してたのが遠い昔のことのようです。

いまやばつちり餌付けされた自覚があります。

恋心かどうかは経験不足でよく分かりませんが、伊藤先輩に食べさせてもらうのが大好きです。

なので、ご飯も食べちゃおうと思います。
ぱく。

もぐもぐもぐもぐ。

「うまいか？」

「はい。とっても美味しいです」

満足そうな伊藤先輩の「うむうむ」を見ながら食べると本当にとっても美味しいです。

人としてのプライドを捨てることで実現する瞬間的幸福の訪れです。

でもちよつと友達には見られたくないな、と思うのは秘密です。

ところで伊藤先輩は私のことをどう思っているのかな？

気に入ってくれているとは思っけど、友美ちゃんたちが言ってくれたみたいに私のこと好きでいてくれるのかな？

というか好きは好きでも恋愛感情なんでしょうか？

飼育員が担当動物をかわいがるレベルの好きだったらどうしよう。

ご飯が砂の味になった。

「もうお腹いっぱいです」

「るーるー、な気持ちで伊藤先輩を見つめると、伊藤先輩はよしよしと頭を撫でてくれた。」

18。みんなの目の中にはちっちゃいおじさんが住んでいる。

学校に行ったら、とっても嬉しそうな友美ちゃんがいた。

「今日はステージ脇でお弁当ねっ」と笑顔で言われた時にちよつとイヤな予感がしちゃうくらい嬉しそうでした。

ステージ脇に行って座ったら、私以外の3人は当たり前のようにお弁当ではなく私を囲んで座った。

「昨日は伊藤先輩とナニしてたのかな？」

隣に座った友美ちゃんが嬉しそうに、かつ、いやらしいカンジに聞いてきたので思わずガン見しました。

友美ちゃんの頭にちっちゃいおじさんが見えるかと思って、見えなかったけど。

「きのう…」

どうやら昨日学校をサボったうえに伊藤先輩といたことがバレているらしい。

なぜだ？

「えっと、クッキーとお昼ご飯を食べました」

嘘は言ってません。

「他には？」

「何も」

「ナニも？」

「ナニも」

どうでもいいけど友美ちゃんの言いまわしが時々とってもセクハラです…。

「愛ちゃんは色気より食い気か…」とがっかりしているオヤジな友

美ちゃんとは対照的に、美幸ちゃんは女子力満点の笑顔で「お昼ご飯もあーんして食べさせてもらったの？」とナチュラルに原爆投下発言をした。

このテロリストめ…！

「そういえば美幸ちゃんは伊藤先輩が同じ中学出身なの知ってた？」
即座にスルーした後で友美ちゃんと有里ちゃんがニヤリと目配せしあうのを見て自分の浅はかさを痛感した。

この場合はまず否定すべきだったみたいです。

顔が熱い。

「伊藤先輩は伊藤翔太君のお兄さんでしょ？」

…？

…え？

「え？」

「愛ちゃん、中学のとき翔太君に告白されてたよね」

にんまりと笑った美幸ちゃんに息が止まるくらいびくりした。
美幸ちゃんなんてそんなこと知ってるの…。

このフリーズなんかデジャヴ。とか考えつつ気が遠くなった。

次の瞬間、私との距離をぐぐつとつめてきたみんなの目の中に、ちっちゃいおじさんがいるのが見えた。
気のせいじゃなく見えた。

「友美ちゃん、今日は充実したお昼休みになりそうだね？」

「有里ちゃんもそう思う？美幸ちゃん、知っていることは全部教えてね？」

「うふふ、私もたいしたことを知っているわけじゃないから、愛ちゃんに聞いたほうがはいんじゃないかしら？」

ぐぐぐつと距離をつめるみんなの目の中にあるちっちゃいおじさんはエロ面で笑った。

19。伊藤さんと秋本くん

そういえば秋本くんは伊藤翔太と仲が良かった。
ぬかった。

「それで伊藤先輩の弟さんってどんな人？告白されたってどういうこと？」

「私は美幸ちゃんの彼氏の秋本貴士さんと伊藤翔太と同じ小学校の出身でした。以上。あとは記憶にないみたい」

「で、いつ恋がうまれたのかな？」

「よく覚えてないみたい」

「…どんな人か伊藤先輩に聞いたほうが良い？」
それはやめて。

「…この話、伊藤翔太というより秋本くんの思い出ですけど聞く？」

せっかくなので美幸ちゃんを道連れにすることにしました。

小学生の頃の私は伊藤翔太にイジメられていた。

「梶川ガリガリばあ」などの不名誉なあだ名をやまのようにつけられました。

なので、ジャニーズ系の容姿に加え足が速かった彼はクラスのボスでしたが、私はこいつ車にでも轢かれなかなーって思ってた。

…しかしなんで小学生って足が速いイコール偉いなんだろうねー？

ある日、クラスの男子が「ホントは男子限定だけど梶川は特別にまげてやる」と伊藤が好きか嫌いかアンケートを持ってきたことがあった。

好きコーナーはまだ空欄だったのに嫌いコーナーには正という字がたくさん書かれているのを見て、ボスザルは私以外からも嫌われて

いるのか性格悪いもんねえザマー三口、とか思いながら私は嫌いコーナーの正に1画線をたした。

その男子は次に私の横に座っていた秋本くんアンケートを差し出したんだけど、秋本くんは迷わず好きコーナーに一を書いた。

「翔太が梶川にしていることはバカみたいだと思うけど、俺にとつては親友だから世界中のヤツがあいつのこと嫌いでも俺はあいつが好きなんだ」

私の顔をまっすぐ見て言った秋本くんに、子供ながらなんて男前だと感心した記憶があります。

そういえば秋本くんは彼と一緒に私をからかったりしたことがなかった。

親友なのに。

「秋本くんスゴイねー」

私は嫌いコーナーに書いた自分の線を消して、好きコーナーと嫌いコーナーの間に線を書き直した。

秋本くんに免じて。

…で、中学校ではほとんど顔も合わせなかったのに、中学2年で発情期に入って頭がおかしくなった伊藤翔太にいきなり告白されたことがあったけど。

「むり」

断ったきりいまにいたる。

できれば金輪際かわりあいになりたくありません。

「…ね。伊藤翔太の話っていうより秋本くんの話だったでしょ？秋本くんはホント男前だよねー。美幸ちゃんと付き合ってるって聞いたときも、大和撫子な美人さん捕まえてさすがは秋本くんだけ、と

思いました」

耳まで真っ赤な美幸ちゃんはとってもカワイかったです。
友美ちゃんと有里ちゃんが「ごちそういただきました」といやらし
く喜ぶくらいカワイかったです。
にやり。

でも伊藤先輩の弟って…。

伊藤先輩は私と伊藤翔太のこと知らないんだよね？
なんかブルーです。

20。女子高生って邪悪。

美幸ちゃんは頬を染めつつ咳ばらいをした。

「翔太君は本当はずっと愛ちゃんが好きだったんじゃないかしら？」

「それってツンデレってこと？」

ツンデレって定義はいくつかあるみたいだけど、この場合は好きだけれど意地悪しちゃうっていう迷惑至極な幼稚園児的愛情表現を恋愛フラグに置き換えるための便利ワードよね？

それが通用するのは二次元か異次元の世界だけだと思います。

「むり」

そんな種明かしされてもちっともトキメかない。

むしろ引いた。

まじウゼエ。

「黒梶川愛になってる」

「悪い顔だわー」

「好きなら優しくして欲しいタイプだもん。嫌がらせしかしてない相手に恋愛フラグ立てようなんて頭おかしいんじゃないかと思うわー」

おまけに存在自体が私と伊藤先輩との関係を微妙にしつつあるなんて許せん。

ボスザル死ね。

「たしかに伊藤先輩は愛ちゃんにあまあまだよねー」

「そうだねー。愛ちゃんにはあの餌付けプレイもたまらんのだろう」

ねー」

「伊藤先輩の弟との三角関係なんてすごいごちそうだったのに、顔も見ないで消えキヤラ決定なんてザンネンだねー」

「ホントザンネンだねー」

「そうかぁ。ダメかぁ。…でも運動会に来るから顔は見られるよ？」

なんですと？

「貴士君から翔太君と見に行くからっておとといメールがきてて、本当は昨日その話をしようと思ってたんだけど、愛ちゃん学校サボっちゃったから…」

「ところでなんでサボりって分かった？」

「昨日の朝、この話をしたくて学校についてすぐ愛ちゃんの下駄箱開けて学校に来てるの確認しちゃった」

「…」

間接的ながらこれも伊藤翔太のせいだと思いました。
やっぱり死ね。

「じゃ、なんで伊藤先輩といたって分かったの？」

「昨日うちの兄貴がやけにキレ気味だったから？」

「あとはぶっちゃけあてずっぽです」

「今朝の愛ちゃんがちよつと挙動不審だったのでカマかけてみちゃった」

「…」

知らない間に自分で墓穴掘ったらしい。
今度から気をつけよう。

「でも思ったよりつまらない話だったね」

「あとは運動会当日のイトウシヨウタくんのがんばりに期待しよう？」

「アキモトタカシくんも見られるよ」

「できるだけたくさん恋愛フラグ立つといいね」

「そうだね。でも立ちそうになれば立てに行くだけだねっ」

女子高生って邪悪。

伊藤先輩との少女マンガな学生ライフを夢見る私にもっと善良なお友達をクダサイ。

21。 梶川愛改造計画

「なにやってんだ？」

あきれ顔の伊藤先輩と中井先輩を横目に、ヒジを肩と水平に横に突き出し、胸の前で合わせた手の平を力を入れてぐぐぐと押し合わせる。

「バストアップ体操です」

邪魔しないで下さい。

ものすごく大事なことです。

「それで三井先輩、これどのくらいやったら良いですか？」

「んー、いつかいいつかいは短い時間で良いから、とにかくまめにヒマみつけてやったら良いと思うよ？」

私は痩せている。

バレエをやっていたときは体脂肪率一桁だったし、いまも18%くらいしかない。

結果、情けないことに体は限りなく少年体形に近い。

なので、ボンキュボンなナイスバディの持ち主である三井先輩を師匠に肉体改造のご指導を受けることにしたのだ。

「甘いモンばっか食べてるくせに太りたくないって飯抜こうとしたり、かと思えば痩せてたいけどムネでかくしたいって、すごい矛盾を感じるんだけど」

ごもつとも。

でもそれが女子です。

伊藤先輩を夢中にさせたいんです。
って言ったらどんな反応するのかな？

伊藤先輩のこと好きかどうか確信できないのは、伊藤先輩が格好良いからだと思う。

イケメン生徒会長に可愛がってもらってたら、誰だって嬉しいんじゃないだろうか？

そう思うと、その程度の想いではうまくいかない気がして自分からは告白できない。

カワイイ後輩ポジション気に入ってるし。

とか思ってたんだけど、伊藤翔太が伊藤先輩の弟だって分かったら急に不安になっちゃって。

むかし私に告白した伊藤翔太がいまどんな気持ちでいるかは興味ないけど、ヤツのせいで伊藤先輩が私と距離をとることにしたらどうしよう、とかすごい不安で。

友美ちゃんたちに相談したら、まずは色気不足をなんとかしようってことになりました。

ムネがでかければイイってわけではないかもしれないけど、色気不足と友美ちゃんが言ったときに有里ちゃんが私のムネを見たのは確実デス。

努力できることはなんでもやります。

髪は美幸ちゃんが行ってる美容院で整えてもらいました。無造作だけど女子っぽいカンジになるように肩の下あたりで揺れたりはねたり動きがカワイくなるようにしてもらいました。

肌は自宅でエステをやっている有里ちゃんのお母さんにお手入れセットを選んでもらいました。お化粧まではしていませんがなんかキレイになった気がします。

友美ちゃんには、これ恥ずかしいかも、と思うことにこそ恋愛フラ

グが隠れている、とアドバイスされました。

いま恥ずかしいなー、と思うセリフがひとつあります。
できることならなんでもやる、というなら言うべきかもしれません。

「伊藤先輩を夢中にさせたいんです」

伊藤先輩も真っ赤ですが私も真っ赤だと思います。

恋の道はキビシイ…。

22。仕込みは上々

運動会当日。

座席こそ大会実行本部にありますが、相変わらずの雑用なのでくに決まった仕事はありません。

しかしあっちこっちからお手伝いやお使いの声がかかるので息つくヒマもなく、パシリをしていただけでもう運動会が終わろうとしています。

このお昼休みが終わったなら、あつという間にフィナーレのクラス対抗パレードです。

「疲れたー」

参加競技を1年女子全員参加の80Mハードル走だけにしといて良かった。

友美ちゃんがとめてくれてなかったら、うっかり3000M持久走に出るところでした。

持つべきものは事情通の友達です。

「自業自得。優先順位つけてちよつとは仕事断れ」

「できない仕事なら断りますけど、みんな忙しいのは一緒なんだからできる仕事ならやらないと」

「…机に突っ伏したまま言うな」

「イイんです。もうあとはパレードだけですから」

「梶川のクラスの神輿は何がテーマ？」

「女神様の行進です」

小柄で愛らしい有里ちゃんが先頭で花をまきながら歩き、そのうしろをクラスの女子が並んで歩いたあと、背丈の同じ私と友美ちゃんが侍女として神輿の先導をして、女神様役の美幸ちゃんが神輿に乗

って進むんです。

ちなみに神輿は男子全員で担ぎます。

「なんか男子虐げられてないか？」

「人聞きの悪いこと言わないでくださいよ」と言いながらパレードの企画立案者である友美ちゃんがあらわれた。

「ほら愛ちゃん、ばさつとしてないで着替えに行こ？」

ほらほら、といいながら腕を掴んで連れていかれました。うう、疲れてるのにー。

しかし、目の醒めるような美人に仕上がった美幸ちゃんを見てとたんにテンションが上がりました。

「すごい！これは目の保養だわ」

愛ちゃんたら…と恥ずかしそうに目を伏せるところがまたタマリマセン。

大きな花がたくさん重なったマキシ丈のワンピースにシフォンでキモノリーブをつけた梶川お手製リフォームドレスに、百円ショップの造花で有里ちゃんが作った花冠。さらに友美ちゃんがメイクして仕上げました。

なぜ友美ちゃんがこんなに上手にメイクできるのか疑問が残りますが、大満足の仕上がりです。

有里ちゃんは花柄のブラウスワンピースの中にふあふあしたパレオを入れて腰に幅広のサッシュ。

友美ちゃんと私は水色のメイド服に白いニーハイソックスです。

友美ちゃんがメイクもしてくれました。

…このメイド服、友美ちゃんの私物なんだよねー。

なぜこんな服をしかも2着も持っているのか疑問が残ります…。

他の女子は列ごとにテーマカラーを決めての私服参加と低予算なが

ら素晴らしい統一感。

ちなみに男子は全員学ランです。

…。

虐げてはないと思います。

「さて、仕込みは上々だし、張り切って恋愛フラグ立てに行くか」
こちらをチェックしながらの友美ちゃんの発言にちよつと不安を覚えただけ、なにはともあれフィナーレです。
張り切っていきましょう。

23。恋愛フラグか妄想か

運動会のパレードで特別賞をいただきました。
やったね。

パレードの後はグラウンドで撮影大会です。

やはり女神様役の美幸ちゃんは大人気で、他のクラスの人までちょっと写真撮ってます。

美幸ちゃん自身は彼氏の秋本くんはこの格好を近くで見たいみたいでちらちらと視線を送っていますが、他校生の秋本くんは遠慮しているのか近寄ってきません。

そういう人です。

出過ぎるようなマネはぜったいにしないでしょ。

隣に伊藤翔太さえいなければ呼びに行つてあげたいところなんだけどね。

「どっちがアキモトタカシくん？どっちがイトウシヨウタくん？」

ふいに友美ちゃんが耳元で囁くからぞわっとしました。

だってなんか言い方がちょっとヤラシかったし。

眼鏡外してメイクしてメイド服って見た目かなりヤラシいけど。

「爽やかそうなのが秋本くん？どつとうしいのが伊藤翔太」

「答えになってない。ま、イヤ。呼びに行こう」

どつぞご自由に、と言つたのに友美ちゃんと有里ちゃんに両側から腕をホールドされてしまった。

「むこうからしたら知り合いは愛ちゃんだけだもんね」

「ねー」

秋本ちゃんと伊藤翔太は近づいてくる私たちにびっくりしてるみたいに見えた。

仮装した女子3人が近づいてきたら誰でもびっくりするとは思っけど。

「秋本くん久しぶりだねー。美幸ちゃんにはいつもお世話になってます。…よかつたらもつと近くで見てあげて？ちなみにあの衣装は私が縫ったんだよ」

「え？あ？…もしかして梶川愛？」

「…もしかしくなくても梶川愛です」

小学校以来まともに口もきいてないとはいえ、中学卒業してまだ2ヶ月なのに忘れられてたって地味にしょつく。

伊藤翔太も固まってるし。

…まあ良いけど。

無視無視無視。

「初めまして中井友美です」

「初めまして松村有里です」

2人が挨拶をしている間も伊藤翔太はちらちらとこちらを見ってくる。なんか不愉快。と思つてあさつてのほうを向いてたら大会実行本部のほうで写真撮影会をしているのが見えた。

伊藤先輩も三井先輩も藤井先輩も中井先輩もいる。

みんな仮装してる。

…伊藤先輩がチャイナ服着てる。

写真欲しい。

「ごめん。ちょっと先輩たちのご行つてくる」

「え？愛ちゃん？」

人生最速ダッシュの記録を塗り替える勢いで本部まで行かせていた

できました。

ダッシュしすぎて止まるとコケそうなのでどさくさにまぎれて伊藤先輩に突進することにしました。

でもこちらに気づいた藤井先輩が伊藤先輩に注意するように促してくれたので、ちゃんと受け止めてもらえました。

身体を離す前に一瞬抱きしめてくれた気がしたのは妄想かしら？

「伊藤先輩、一緒に写真撮りましょう！」

そう言ったら伊藤先輩にデコピンされた。

愛がこもっている気がしたのは妄想かしら？

24。明日会いに行きます。

「愛ちゃん携帯かして」

運動会からの帰り際に友美ちゃんが私の携帯でどこかにメールを送った。

メアド直接入力してたけど、メアドを暗記してる相手って相当に大事な相手じゃないかな？

普通、携帯に登録してあっても覚えたりしないよね？

「いまのメールはドコに送ったの？」

「ど直球にあざとい愛ちゃんを見習って自分にフラグを立ててみました」

「は？」

「うまくいくかはわからないけどねー」

につこり笑った友美ちゃんがいつになく乙女に見えてびっくりした。

「ど直球にあざといって何？」

「あのね、愛ちゃんって計算上無謀なことでもやりたいことを反射的にやりに行くから」

「バカってこと？」

「小賢しくないってこと。私は賢く立ち回ろうとしてなにをやりたんだか分からないカンジになることがあつて。でも愛ちゃんって普段はわりと構えてるのにいざというときすごい動物的というかシンプルになるからさすがだなつて。欲しいモノを手に入れようと思つたら愛ちゃんのやり方のほうが良いんだらうなつて思つたので、私ならしないようなことをしてみることにしました」

「つまり、メールの相手は友美ちゃんの好きな人？」

「愛ちゃんは伊藤先輩を好き？」

「…たぶん」

「じゃあ私もたぶん。なぜだかはよくわからないけど、むこうに私をそばにおきたいと思わせたいし、手に入れたと思わせたいし、好きになってもらって夢中にさせたい。…たぶん好きなんだろうね」

友美ちゃんの言ったことはそのまま私の心にすとおさまった。

たぶん好きなんだろうね。

曖昧さも身勝手さもテンコ盛りですが。

「でもなんで自分の携帯で送らないの？」

「別れるときに着信拒否指定にされたから？」

「前に付き合ってた人なの？！」

「そう」

「…。うまくいくと良いね」

「うまくいかなかったらなくさめてよ」

メールの送信文はひとこと。

明日会いに行きます。

差出人の記名もなしに私の携帯から送って通じるんだろうか？

どうか通じますように、と友美ちゃんのために祈った。

「そうだ。このメールに関して一切うちの兄貴には他言無用でお願いします。…もしちらりとでも匂わすような真似をしたら、イトウショウタくんの頭に恋愛フラグを突き立てるよ？」

友美ちゃんのために祈ったのにひどいこと言われた…。

今日、秋本くんは帰る直前に美幸ちゃんになにかをこっそり囁いた。美幸ちゃんが顔も耳も首も真っ赤になるようななにかを言っていた。

その様子を見て後片付けをしていた男子が多数がっかりしているのを目撃しました。

あいかわらず男前がハンパない人です。

一方の伊藤翔太は、私が伊藤先輩といるのを大変険しい表情で睨みつけてました。

意味不明でした。

できれば金輪際かわりあいになりたくありません。

中井先輩にはなにも言わない匂わさない、と心の中で唱えながら家に帰りました。

25。悪いのは私

代休あけの火曜日。

3限の移動教室からの帰りに先生から頼まれた雑用のおかげで、みんなよりだいぶ遅れて教室に戻るようになってしまった。

でも先生のせいだからそうそう怒られないだろう、と余裕がまして歩いてたら、偶然にも藤井先輩と一緒にあった。

そして廊下でいきなり藤井先輩の友達に叩かれた。

え？

「ヒナコ！」

藤井先輩が掴んだ手を振り払って立ち去った彼女の口が、アンタナシテ、と動いた気がした。

むかし、バレエで初めてセンターをもらったとき、それまでセンターだった6年生との間で同じようなことがあった。

その時は教室の玄関前の階段で後ろから突き飛ばされた。

びっくりして振り返ったら、いまと同じような表情で「あんたなんて死ねばいい」と言われた。

いつだったか中井先輩に「悪いけど和也の出方を待っててやって」といわれたことにはちゃんと意味があったのかもしれない。

それに、いままでずっと藤井先輩から距離を取られていたのはなんとなく感じていたし。

だから、私のせいなのかな、と思った。

「愛ちゃん、大丈夫？ごめんね、大丈夫？」

藤井先輩のほうがよくぼと痛そうな顔してる。

優しいなあ。

「大丈夫です。それよりお友達のところに行ってあげて下さい。藤井先輩、心配してくれてありがとうございます。あと、たぶん、迷惑かけてごめんなさい」

ゴメンね、ともう1度言って藤井先輩は走って行った。

バレエの時にくらべると、いまのビンタなんてカワイイもんだ。

おまけに藤井先輩は彼女の友達なのに、心配してくれたし謝ってくれた。

教室に帰れば、友美ちゃんや有里ちゃんや美幸ちゃんたち友達がいる。

…なのになんで私は泣くんのだ。

とりあえず人に見られるとなんなので、近くのトイレに隠れた。

泣きながらそんなことを気にする自分に感心するし、うんざりする。顔が腫れたりしていいことを確認して安心した。

さらに顔を洗うといくらかすつきりもした。

そういえば嫌なことがあったときは首の後ろとか顔とか手とかを洗うんじゃなかったっけ？

効果テキメンだ。

10分遅れで教室に入りながら、嫌なことがあったときじゃなくて罪悪感を拭い去るために洗うんだった、と思い出した。

なんかよく分かんないけどやっぱり悪いのは私だったのかな、と思

つ
た。

26。友達がいて良かった。

4限の終わりに友美ちゃんから「今日もステージ脇でお弁当にしよう」と言われました。

友美ちゃんが元カレとよりを戻しに行った話が聞ける？とテンションが上がりました。

このテの話題ではいつも攻められるばかりなので、今日は攻めます。にやり。

と思ったんだけど。

「…で、さっきの10分間の遅刻はなんだったの？」

なぜ私が攻められなくてはいけないんですかね？

「確実に良くないことがあった顔してたよ？」

まじで？

友美ちゃんがえすぱーとかじゃなくて？

動揺してしまいましたが、私を心配してくれた藤井先輩のためにもいちおう話をそらせてみようと思います。

「それより、今日も眼鏡じゃないんだね？」

「ああ、メイド服取りに行ったときに回収した使い捨てコンタクトレンズの使用期限がもうすぐだったから」

「それって昨日の彼と関係あるのかなー？」

「R18指定の話を昼休みにする趣味はないよ？そういうえば昨日の私は梶川家にお泊りしたことになってるのであとはよろしくね。で、さっきの遅刻は藤井先輩のお友達と関係あるのかなー？」

異常にうまい声マネに打ちのめされました。

そして言葉の内容から友美ちゃんには敵わないことを悟りました。いろんな意味で。

「なんで藤井先輩のお友達って分かったの？」

「運動会のパレード前に、藤井先輩の隣で髪も肌もやや色素の薄いハーフ顔の3年女子がものすごい形相で大会実行本部付近を睨んでるのを見たから？ちなみにそのとき大会実行本部では伊藤先輩が机に突っ伏した愛ちゃんの頭を撫でまわしてました」

「はー…」

返す言葉もございません。

「…ということがあったんだー」

まるっとげるはきました。

「でも愛ちゃんってまだ伊藤先輩に告白もされてないよね？」

それまで黙っていた有里ちゃんが言った。

「とばっちりも甚だしいと思うんだけど」

めずらしくお怒りです。

「たしかにいろんな判断材料が足りないとは思っけど、それでも伊藤先輩じゃなく愛ちゃんに手をあげるなんてひどいわ」
美幸ちゃんも眉をしかめてます。

「ま、女の怒りの対象は女ってことで」

にやり、と不敵に笑う友美ちゃんもやっぱりどこか怒った様子です。

…なんか、不謹慎にも嬉しくなっちゃった。

ああ、みんなは私のことで怒ったりしてくるんだなあ、って。

すごく、心があたたかくなった。

「…愛ちゃんのネジがはずれた」

「うわ、なんで？」

「笑う要素はなかったはずだよ？」

「友達がいて良かったなあって思ってた」

言葉にしたらなんか安っぽくてあわてて手で口をふさいだけど、みんなは優しく笑ってくれた。

友達がいて良かった。

27. どうする梶川愛？

「…ところでさっき言ってた友美ちゃんの彼ってどういうこと？」

「ぜんっぜん話が分からなかったんですけど？」

美幸ちゃんと有里ちゃんが友美ちゃんに詰め寄った。

そういえば、友美ちゃんがメールを送ったこと2人は知らなかったんだっけ。

にやり。

「友美ちゃんが運動会の帰り際に私の携帯から元カレに明日会いに行くってメールしたんだよ」

「…黒梶川愛」

ちっ、と舌打ちした友美ちゃんが目を暗く輝かせて邪眼ビームを出しそうになったところで昼休み終了5分前の予鈴がなった。

えっと、友美ちゃん魔族とかじゃないよね？

「さて美幸ちゃん、私たちとうぶん話題には困らないみたいだね？」

「そうね有里ちゃん、明日のお昼休みが待ちきれないわね？」

いそいそとお弁当箱を片付ける2人の肩や背中には、100人乗ってもダイジョウブっ！と物置のコマーシャルばりに手を振るちっちやいおじさんたちが見えました。

みんなファンタジーだなあ。

…とのんきな気持ちのまま放課後の創己会室に行くと藤井先輩が泣いててびっくりした。

なんか高校生になってからびっくりすることがやたら多い。

バレエ時代と生活が全然違うからかな？

バレエやってたときは、はたから見たらハデハデしい毎日を送ってるように思われがちだったけど、運営上必ずある種の流れというかローテーションがあつてそんなにびっくりするようなことってなかった。

本番直前の1週間で毎日振り付けやら立ち位置やらが変わることはあつても、そんなの予定調和みたいなもので。

良い公演にするっていうのが最重要課題で、個人という存在があまり価値をもたない世界だったから、センターも群舞もただのパーツだった。

「梶川さん」

わざわざみんなの注意を向けるように声を出した中井先輩の表情に、どこことなく友美ちゃんに似たところがあつてちよつと励まされた気持ちになった。

世の中はバレエとは違う。

みんなこれでもかとひとりひとりでびっくりする。

正解が分からないまま自分の行動を決めてその責任を負わなければならない。

不安だし、怖い。

でも喜びもある。

なんとなくな充実感もあるかもしれない。

「梶川……」

伊藤先輩が私の苦手なお怒りスイッチを押されているらしいのを見てちよつとくじけそうになった。

いま、うまくすれば私はこの創己会室の中に漂う気まずい空気をな

んとかできるかもしれない。

でもひよっとしたらそれは間違いで、いますぐまわれ右してなかったことにするのが1番正解に近いのかもしれない。

よく考えよう。

しずかにすばやく考えてみよう。

…あんまりなんにも思いつかん。

さあ、どうする？

28。あれ？

放課後の創己会室に伊藤先輩と三井先輩と中井先輩と藤井先輩と私。そこまではいつもと同じですが、藤井先輩が泣いています。非常事態です。

私は今日の午前中に藤井先輩のお友達にビンタされました。伊藤先輩関係のトラブルです。

でも藤井先輩が泣かなくてはいけないうなことではなかったはず。です。

そのトラブルのもとになった伊藤先輩はなんかものすごく怒ってます。

いるだけで怖い、というのはいまの伊藤先輩のためにある言葉です。藤井先輩が泣いた原因はこの人のせいな気がします。

あれ？

私がビンタされたのもこの人のせいだったよねー？

ところで三井先輩は、私もうお手上げー、みたいなカンジでこちらを見ています。

さらに中井先輩は、友美ちゃんがめんどくさい仕事を人に押し付けるときにみせる顔でこちらを見ています。

つまり、私がこの場をどうにかしないといけないみたいです。

あれ？

なんかこれおかしいよねー？

なるべくKYなカンジで顔の横に右手をあげました。

「伊藤先輩に質問してイイですか？」

この結果次第でどうするか決めよう。

「伊藤先輩はどうして藤井先輩を泣かせてるんですか？」

お前がナニ言ってるの？みたいな顔した中井先輩の反応で確信した。やっぱりビンタ事件が原因みたいです。

私の中ではもう終わった話だったんですけど？

一切責める口調にならないように、むしろ無邪気に聞こえるように全神経を集中した。

イラついてることに気づかれると事態を悪化させることになりそうだし。

「私は、伊藤先輩とのことでヒナコ先輩に頬を叩かれて痛かったし傷つきました」

うつゝ、と伊藤先輩が怯んだのを確認してから言葉を続けた。

「だけど、藤井先輩は彼女の友達なのに叩かれた私を心配してくれたい謝ってもくれて嬉しかったんですよ？」

そのむかし、お前の言ってることはいちいち正しくてムカツク、と私に言ったのは誰だっけ？

「伊藤先輩のしていることは良くないことだと思いますよ？」

私の記憶が確かならば、小学生だったあなたの弟の伊藤翔太が私にこてんぱんにやっつけられた後で言ったセリフです。

「ごめん…」

伊藤先輩の口から出てきた言葉に、私以外の全員がびっくりして伊藤先輩を見つめた。

見つめられた伊藤先輩は手で口を覆って赤くなった。

「それは私に言っただんですか？ 藤井先輩に言っただんですか？」

お前まだ言うか？！ みたいな顔で中井先輩がこちらを見えています。

気にしませんけど。

「藤井も、梶川も、ごめん……」

小さな声で、でもはつきりと謝ってくれて嬉しかった。

伊藤先輩は好きでいてイイ人です。

良かった！。

ちよつと嫌いになっちゃうかと思ったよ！。

「謝ってくれて嬉しいです。私は伊藤先輩が大好きです」

私の口から出てきた言葉に、私以外の全員がぴきーんと固まった。

……？

あれ？

なんかビミョーな空気が流れちゃったよ。

これって告白したことになるのかなー？

29。ダメ人間かもしれない

あれ？

いま私すっかり伊藤先輩に告白したことになるのかな？

固まってる先輩たちを見てそう思った。

たしかに伊藤先輩に大好きって言ったねワタシ。

違うところに神経を使ってたからつい口が滑っちゃったわー。

でも大好きって恋愛に限らず幅広い用途がある言葉だよねー？

実際そういうつもりで言ってたわけじゃないしー。

「どうかしましたか？」

KYスキル炸裂でなかったことにしてみました。

まじで？！みたいな顔した中井先輩でしたが、さすがは友美ちゃんのお兄さんです。立ち直りが誰より早かったですから。

「いや、どうもしない。それより仕事しよう」

うん、仕事しよう。と三井先輩と藤井先輩が続いて席に着いたので、私も席に着いた。

「じゃ、運動会運営について各委員会と先生から寄せられた要望と感想をまとめたら今日の創己会は終了になります。…和也、お前も座れ」

ひとり固まったまま取り残されていた伊藤先輩を中井先輩が座らせたらなんか元通りになった。

たぶんね、叩かれるくらいだからまだ私の順番じゃないと思うのよ？
そこに無理矢理割り込んでもダメでしょ？

もうすぐ中間テストも始まるっていうのに修羅場とかないわー、と
か思ったりもするし。

あざとい。

うん。

我ながらあざといと思います。

でもしょうがないじゃん。

学生の本分は勉強です。

「1番の課題はフィナーレのパレードで出る廃棄物の処理について
だな。昨年課題にされた重量についてはクリアしたけど、今度は分
別だってよ。再生可能な資源、ゴミまでそのまま可燃ゴミとしてゴミ
処理施設に持ち込んでいることに対して自治体からクレームがきた
そつだ。…俺たちが問題点を洗い出して、後期創己会が対策案を出
して、来年度前期創己会がガイドラインを配布、かな？というわけ
だから梶川さんしっかりね」

へ？

「愛ちゃんは1年間だけど、私たちは前期で創己会退任だから、後
期からは2年生が創己会を運営していくことになるでしょ？」

三井先輩の説明に納得はした。

先輩たち受験生だもんね。

でも心細くなってしまったのはどうしよう。

高校に入学してすぐ創己会に所属することになったときには創己会

を仕事というか義務みたいなものだろうと考えてたからそんなこと
思わなかったけど、思いのほか居心地良く時間を過ごしたせいかた
った2ヶ月ほどでダメ人間になったらしい。

想像しただけで心細くて泣ける。

「うわ、愛ちゃんが泣き出した」

「あああ、愛ちゃん泣かないで。伊藤君、お菓子あげてお菓子」

あわあわと三井先輩と藤井先輩になぐさめてもらってようやく泣き
止みました。

「すいませ」

謝ったら噛んだ。

もう今日はしゃべるのやめと」。

30。あざといのはどっち？

「うちの兄貴によると、結局のところ橋田雛子はストーカー体質なんじゃないかって」

…。

「橋田先輩はバツチリ付き合ってる気でいたみたいだけど、伊藤先輩はそういうつもりはなかったみたいだし、はたから見ているうちの兄貴や藤井先輩もどう扱ったら良いか分からなかったんだって」

「でも普通そんな誤解ってあるかしら？」

美幸ちゃんもつともなことを言った。

「だよねー？でもそれをツツこむと橋田先輩は精神がイタい人なんじゃないかってことになりそうで、あえてパンドラの箱を開ける人はいなかったらしい」

「でも実際にイタい人なの？」

有里ちゃんが納得しかねるように聞いた。

「たぶんねー。いちおう昨年度の終わりに伊藤先輩はその気がないことを伝えたらしいんだけど、受験勉強だつてあるんだし、みたいなことを言ったら橋田先輩のなかで、受験が終わるまでは待つてて、という変換をされたらしいわ」

饒舌な友美ちゃんの顔に、自己保身、と毛筆で書かれているのがはつきりと読めます。

「ちなみに伊藤先輩が藤井先輩を泣かせたのは不可抗力だつて。なにせほら、伊藤先輩ってパワハラスイッチ入ると存在自体が凶器になるから？」

話のイニシアチブを持ちつつ昼休みの残り時間を計算しているのが

手にとるように分かります。

「橋田先輩も男絡みじゃないところではいたってフツー、というかなんかうまく話のつじつまを合わせてくる人らしくて、ちょっと違和感を感じることがあってもこっちが勘繰りすぎなのかな？って思わされちゃうんだってー」

うまくいかなかったらなぐさめてよ、と元カレに会いに行く前に言ってたときには、聞かなくても後で話してくれるんだろうなー、って軽く考えてたんだけど？

「愛ちゃんさつきからずっと黙ってるね？」

「んー、そう？」

R18指定がどうのこうのはたぶんこちらを怯ませるための飛び道具みたいなモノだろう。

肉体行為について具体的な解説をお願いしているわけではないし。

「実は友達付き合いの経験が足りないもんで、どこまでプライバシーに踏み込んで良いか迷ってる。男女間の付き合いの経験も足りないせいかヘタこいて痛い思いしたばかりだし」

「愛ちゃんが怖い……」

うるうると友美ちゃんがカワイイ顔をしました。

その背後に、邪悪スキル発動、とさえ書かれてなかったらそうとうなカワイイさだったと思います。

「いや、ホントに。友美ちゃんは大事な友達だから、あからさまに話そらされると地味にツライしどうしようかと」

「…黒梶川愛」

ちっ、と邪悪に舌打ちした友美ちゃんが私には1番カワイくみえる
んだけどなぜかしら？

昼休み終了5分前の予鈴が鳴って残念でしたが。

「週末に梶川家に泊めてくれるならその時に話します」
脱力した友美ちゃんの言葉に頬がゆるんだ。

今週末が楽しみです。

31. ダメな娘

週末。

今日は梶川家でお泊り会です。

「…梶川家は庶民って言ってたっけ？」

みんなの言いたいことはわかるよ？

梶川家の住まいについてよね？

うちは母方の曾祖母の生家に住んでいるんだけど、大きな日本庭園と大正ロマン漂う年代物の外観はそのままに、全館床暖房完備などの近代リフォームがばっちり施された快適な住まいとなっておりま
す。

…が、残念なことにこの家は梶川家の持ち家ではない。

実は母方のおじいちゃん名義の空家に居候させていただけ
で、リフォームから固定資産税までおじいちゃんの管轄なのでうち
はノータッチ。

というわけでうちのお母さんはなかなかすごい箱入りお嬢様だっ
たんですが、梶川家は間違いなくいちサリーマンが家計を支える庶
民の家なのデス。

家賃とかないし、バレエをやめて出費も減ったけど、それでも貯金
とかあんまりなさそうだし私立大学とかキツイだろうなー、って思
うくらいに庶民だよ？

「梶川ママが箱入りお嬢様っていうのはすっごく納得できるわー」

有里ちゃんが遠い目をして言った。

「家庭料理で羊を食べるなんて普通ありえないし」

…ホントはあの料理、おじいちゃんの家のお手伝いさんが用意した

んだよ、って言ったらさらに誤解されそうだったから黙っておいた。

お母さんの名誉のために言うと、梶川家の食事はきちんと毎日お母さんが作っている。

ちゃんと美味しいごくフツの家庭料理。

今日みんながくるのも楽しみにしてて、なに作るのかなー、っておとといから言ってたくらいだったんだけど。

おじいちゃんとの電話でその話をしたら、愛の友達におかしな食事をさせるわけにいかないって押し切られたそう。

なんでもむかしうちのお母さんがお父さんとの結婚の了承を得ようと、主婦としてやっていけることをアピールするために作った料理が殺人的なマズさだったそう。

ただお父さんがその料理を完食したことで結婚の了承をもらえたという…。

いったいどんな料理だったんだろうね？

とにかく、おじいちゃんの認識ではお母さんの料理は危険とされているので、よそからお預かりした大事なお子様たちに食べさせるわけにはいかないそう。

たぶん料理だけじゃなくて、お母さんのことをいつまでたっても半人前以下のどうしようもないお嬢様として見ているんだと思う。

過保護なんだよね。

ホントはそんな心配必要ないのに、とお母さんに言ったら、ダメな娘でいるのも親孝行のうちよ、とウインクされた。

そんなもんかなあ？

…よく分かんないや。

それよりいまは友美ちゃんの話をしようぜ。

そのためのお泊り会よ？

と見つめたら、友美ちゃんはへにやあ、と眉を下げた。

「それが、なにがあったか記憶がないし、どうなったのかもよくわからん」

32。困ったヒト

「それが、なにがあつたか記憶がないし、どうなったのかもよくわからん」

…？

「それは、元カレとの再会に舞い上がっちゃってとかそういうこと？」

有里ちゃんが聞いた。

「いや、違う。えーとねー、最初から話すから、なるべく説教とツッコミは無しで聞いて？」

友美ちゃんが語った内容はこんなカンジ。

友美ちゃんの元カレは28歳のウェブデザイナー。

彼とは昨年の夏休みに図書館で知り合った。

何回か顔を合わせているうちに彼を好きになった。

友美ちゃんは彼と仲良くなることに成功した。

さらに仲良くなりたかった友美ちゃんは彼に友美ちゃんは18歳だと思わせることに成功した。

友美ちゃんは彼氏彼女な関係になることに成功した。

ちなみに、成功した、という点につきましては、友美ちゃんの全力投球のあざとい賭けが成功した、という意味合いを含んでおりマス。

しかし11月に、夏休みの課題だった読書感想文が友美ちゃんの顔写真入りで新聞に掲載されたことで中学3年生であることがばれた。問い詰められた際に彼の地雷を踏みまくった友美ちゃんは「もうお前のことは信用できない」と着信拒否指定にされた。

部屋の合鍵については思いつかなかったのかなんなのか取り上げられなかったものの、その後顔を合わせることはなかった。
先日まで。

友美ちゃんはまだ子供だから会いに行ける時間にも限りがあるし、会わないようにするのは簡単だったみたい。

だから会いに行ったときは一晩中でも待つつもりで、梶川家に泊まるって嘘をしておいたんだって。

…で、会いに行っただけ彼は予想通りなかなか帰ってはこないし、お腹の空いた友美ちゃんが冷蔵庫を開けると大人女子が飲みそうな甘いお酒がいっぱい入ってるし、なにこれムカツク、とひとりで酒盛りをはじめ、さらに2度ほどリバースしながらも飲みつづけ、気がついたら朝で、彼と仲良くベッドの中で、しかも避妊しなかった形跡があつたらしい。

…。
避妊しなかった形跡ってナニ？
いや、それどころじゃない。

思わず友美ちゃんの腹部を凝視しました。

「まさか…」

「いや、たぶん大丈夫」

「なんでそんなこと分かるのさ？」

「えーとねー、オギノ式？」

「なにそれ？」

「たぶん保健体育の教科書に載ってるよ」

「友美ちゃん、彼になにひとつ確認してないんでしょ？」
あきれたように美幸ちゃんが言った。

「たぶんそれが間違いなのよ」

冷静に結論を出した美幸ちゃんはすごいです。

さすが男女交際経験者です。

私と有里ちゃんなんて、ツッコミどころ満載のオトナな話にアワアワでした。

でも美幸ちゃんに言われて気づきましたが、たぶん友美ちゃんはいろいろ確認すべきことをほったらかしにしてきたようです。

友美ちゃん自身にツッコまれたくない部分があったからでしょうか。たぶんそれはずっと前から。

私のこと好きですか？

私たち付き合っているんですか？

私たち別れないといけないんですか？

ずっと一緒にいて良いですか？

たくさんのことをほったらかしにしてきたツケがまわってきてるのに、この期に及んでさらにほったらかしな友美ちゃん。

困ったヒトです。

でもなぜでしょう？

ちよっと自分を見ているような気持ちになります。

33。苦手な人種

私には苦手な人が何人かいる。
なかには、できればかわりあいになりたくないな、と思う人もいる。

「細川のお姉さんがね、愛に明日の午後から遊びにこないかっていうんだけど」

お母さんが言った。

細川のお姉さんは、私が最も苦手で最もかわりあいになりたくない人だ。

しかも、いまは中間テストの真っ最中。

「愛はテスト期間中なんですけど…」

お母さんを困らせたくないけど、行きたくないで断る口実を言ってみた。

細川はお母さんの旧姓だ。

そして細川のお姉さんというのはお母さんの1番上のお兄さんの奥さんのことだ。

私が小学2年生だったときのお正月、細川家で、おじいちゃんがお年玉をくれながら「愛はすっかり可愛くなっただな」と言ってくれた。

私は「えー、そんなことはありません」と答えた。

実際、ガリガリに痩せた私はお世辞にも可愛くはなかったと思う。そんなことがあった後のお使いで台所にお酒のおかわりをもらいに行くと、細川のお姉さんに「誰も本気であなたを可愛いと思っていないわけではないのだから、わざわざ否定せずにありがとございますと話を合わせておきなさい」と言われた。

びっくりした。
そりゃそうだろ。

嫌われてる、と思った。

ところが、私がバレエでセンターをやるようになると、手の平をかえたようにあたりが良くなった。

正直、うわ、気持ち悪い、と思った。

そしてバレエをやめると、無言で距離を置かれるようになった。

この人のこと苦手、と思った。

さらに今年の4月、高校に首席入学したことが分かった、「愛ちゃんならやれると思ってたわ」とやたら高そうな腕時計をプレゼントされた。

否定せずに、「ありがとうございます」と話を合わせておいた。

どう考えても、会いに行きたい人ではない。

しかしお母さんは引き下がらなかった。

「竜一君がお見合いしに帰ってくるんだって」

「……」

それ私に関係ないじゃん。

竜一さんは細川のお姉さんの第1子ご長男様だ。
背が高くて足が長くて、やたら目つきが鋭いインテリヤクザな見た目をしていた。

ただし、最後にあつたのがもう5年ほど前なのでいまはどうなっているか分らない。

なにせ竜一さんはいま32歳になっているはずだ。

ハゲはじめているかもしれないし、腹が出ているかもしれない。

「細川のお姉さんは、愛と竜一君は気が合うみたいだからぜひ会いにきてくれって」

気が合うって、最後に会ったとき私は10歳で竜一さんは27歳だったんですけど？

もし気が合うとしたら、たぶん細川のお姉さんとかかわりあいになりたくないと思っっているという一点のみです。

竜一さんははっきりと細川のお姉さんを嫌っていた。

しかし細川のお姉さんは竜一さんとの不都合についてはスーパースキルを発動していて自分ではいっさい向きあわない。

今回は見合いをして頂くために、私に竜一さんのご機嫌取りをさせるつもりなんだろう。

いつのまにか私は細川のお姉さんの手駒認定を受けたらしい。

それにしたって私はテスト期間中なんですけど。

あまりに理不尽でなんかどうでもよくなってきた。

「…行きます」

お母さんが行けと言っなら。

本当は竜一さんのことも苦手なんだけどなー、と思っって憂鬱になった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8198y/>

思春期スイッチ。

2011年12月28日07時45分発行